

和辻哲郎『近代歴史哲学の先駆者』とヘルダー :
和辻哲郎文庫Ideen zur Philosophie der
Geschichte der Menschheitを手がかりとして

著者	笠原 賢介
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	82
ページ	1-17
発行年	2021-03-15
URL	http://doi.org/10.15002/00024066

和辻哲郎『近代歴史哲学の先駆者』とヘルダー

—和辻哲郎文庫 *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*
を手がかりとして—

笠原賢介

はじめに

本稿は、法政大学和辻哲郎文庫に収められたヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（1744～1803）の主著 *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*（『人類歴史哲学考』1784～91、以下『イデー』）に残された和辻哲郎（1889～1960）の書き込みを手がかりとして、和辻の著書『近代歴史哲学の先駆者——ヴィコとヘルダー』（1950）に示されたヘルダー論の特質を考察するものである。

和辻哲郎文庫の本格的な調査は、1991～93年にかけて科学研究費を得ておこなわれ、蔵書に残されたすべての和辻の書き込みのマイクロフィッシュ化がなされた。その成果は濱田義文（研究代表者）『和辻哲郎の思想と学問に関する基礎的研究 付 法政大学所蔵和辻哲郎文庫マイクロフィッシュ収録目録（課題番号 03451008）平成3年・4年度科学研究費補助金一般研究(B)研究成果報告書』（1993）としてまとめられた。研究分担者であった笠原は、研究成果報告書に「和辻哲郎とヘルダー——和辻所蔵本 *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit* を手がかりとして——」を執筆した。この研究成果報告は笠原のその後の一連の和辻とヘルダーとの比較研究・ヘルダー研究の出発点となる論証を示したものであるが、科研費報告書という性格上、入手や閲覧が困難な状況に置かれている。

報告書公表の後、1994年に法政大学図書館編『法政大学図書館所蔵 和辻哲郎文庫目録』が刊行され、和辻文庫の概観は容易になったが、ヘルダーに関しては、和辻文庫には『イデー』は含まれていないとの誤った指摘がなされてもいる⁽¹⁾。そのようななか、2010年に出版された牧野英二『増補・和辻哲郎の書き込みを見よ！和辻倫理学の今日的意義』（法政大学出版局）が、和辻文庫ヘルダー著作集の『イデー』の写真版を掲げ（同書84～85頁）、和辻所蔵本『イデー』の所在は広く知られるようになった。だが、写真版の解説においては、もっぱら和辻の『風土——人間学的考察』（1935）との関係が述べられ、『近代歴史哲学の先駆者』は付随的に言及されるにとどまっている。1993年の報告書において笠原は、和辻文庫の『イデー』は『風土』ではなく、『近代歴史哲学の先駆者』執筆の際に用いたものであり、同書に15年先立つ『風土』は別の版の『イデー』を用いていると指摘し、和辻文庫『イデー』の書き込みは『近代歴史哲学の先駆者』との関連で読み解かれるべきものであるとの論

証を行ったが、この点は写真版解説においては生かされていない。

本稿は、以上の状況に鑑み、1993年の笠原の研究報告を踏まえ、その後の知見に基づく補訂と増補を加え、『近代歴史哲学の先駆者』と和辻文庫の『イデー』との関係を再説するものである。

1. ヘルダーと和辻哲郎

はじめにヘルダー、および和辻とヘルダーとの関係について基本的な事を述べておく。

ヘルダーは18世紀ドイツの思想家であり、著作活動は文芸批評を中心として哲学に及んでいる。文芸批評と哲学的著作は彼において、彼のもう一つの重要な領域である翻訳と連動する形で展開され、生涯を通して膨大な著作を残した。同時代人に15歳年長のレッシング(1729~81)、20歳年長のカント(1724~1804)がいる。若きヘルダーはケーニヒスベルク大学でカントに学び大きな影響を受けている。

哲学に関わる著作としては『言語起源論』(1772)、『メタクリティーク』(1799)、『彫塑』(1778)、『人間性形成のための歴史哲学異説』(1774)、『イデー』などがある。『言語起源論』とカント批判の書『メタクリティーク』は、言語と思考の結びつきを説いたものとして、現代哲学の主題を先取りした作品である。『彫塑』は触覚／感情(Gefühl)に着目した感覚論として、18世紀ヨーロッパの感覚論・感性論のなかで異彩を放つ。『人間性形成のための歴史哲学異説』と『イデー』はヴォルテール(1694~1778)に始まる歴史哲学——歴史を救済史観から解放して内在的に考察する構想——を独自の仕方で開催した作品である。

『イデー』においては、今日から見て様々な制約が指摘できるものの、当時主流であったヨーロッパ中心の見方を批判し、ヨーロッパ内部の多様性を含め地球上に展開する多様な言語、文化を対等に考察する視点が押し出されている。近年、チャールズ・テイラー(1931~)らにおける多文化主義をめぐる議論においてヘルダーが注目されているのはこのゆえである⁽²⁾。

ヘルダーは長らく反啓蒙の非合理主義者、ドイツ・ナショナリズムの始祖とされてきたが、1980年代以降、このようなパターン化された見方を取り払って、古典古代から啓蒙に至るヨーロッパ思想史のコンテクストに置き戻して再評価する流れが生まれている。この流れと並行して、ヘルダーをドイツ・ナショナリズムと結びつけた19世紀後半から20世紀前半にかけてのヘルダー受容史の批判的解明も始まり、今日の研究の前提となっている⁽³⁾。和辻とヘルダーの比較研究においても、両者無媒介に比較するのではなく、ヘルダー研究の現段階と受容史研究を踏まえることが求められている。

ヘルダーは、わが国における西洋思想の受容の過程において、カントやヘーゲルに比して、ほとんど注目されることがなかった。そのようななかでの例外が和辻哲郎である。先に言及した『風土』において和辻は、同書の主題である〈風土〉の問題に先駆的に着目した思想家としてヘルダーを挙げ、同書の第5章「風土学の歴史的考察」において「ヘルデルの精神風土学」という一節を設けて『イデー』を紹介し、論じている。15年後の『近代歴史哲学の先駆者』においてもヘルダーを取り上げ、和辻はヘルダーの歴史哲学に、ヴィコ(1668~1744)と並ぶ高い評価を与え、結尾の一章で『イデー』を中心

としたヘルダーの紹介・検討をおこなっている。『イデー』の歴史哲学は「人間存在の歴史的風土的構造」の把握に基づいた、「地球上のあらゆる民族の存在の権利を公平に承認する」立場の表明であり(VI, 397)、「十六世紀以来の〔ヨーロッパの〕視圏の拡大に伴う歴史的自覚」(ebd., 382)の結晶とされるのである⁽⁴⁾。また『倫理学』下巻(1949)においても、これと同様の観点からヘルダーへの言及がなされている(XI, 41 u. 137ff.)。

〈風土〉の問題をはじめとして、ヘルダーは和辻の思索の中核において、思想的共鳴、対話の対象として存在していたといつてよいであろう。ヨーロッパを〈文化・野蛮〉の絶対的な尺度とせず、地球上のさまざまな地域や時代に展開する人間の多彩な生活形態を対等に考察しようとするヘルダーの思考、非ヨーロッパに対するヘルダーのそのような態度が、和辻の共感と関心を引き起こしたものと思われる。

和辻の著作におけるヘルダーの紹介は簡にして要を得たものであり、和辻の見解とヘルダーのそれとの境界線も多くは明確である。だが、そこにはまた問題もある。ヘルダーの紹介は、あくまでも和辻の問題関心を通してのものであり、そこには彼なりの取舍選択が行われているからである。その結果、和辻によって描かれたヘルダーとヘルダーの思想とは、互いに交差しながらも、微妙なずれが生まれていることも否みがたい。この点を考察することによって、和辻、ヘルダー両者の思想の特質が新たな仕方で浮かび上がるものと思われる。本稿では『近代歴史哲学の先駆者』に焦点をしばって、和辻がヘルダーをどのように読み、読まなかったかを検討してみたい。このような作業を行うのも、単なる詮索や顕彰のためではなく、そこに浮上する問題が両者の接点の一つである、ヨーロッパ文化の絶対化への批判と非ヨーロッパ文化の承認という主題を、今日考えてゆくうえで示唆を与えられるからである。それはまた、明治以来の〈西洋文化 対 日本〉という主題の考察にも示唆を与えられると思われる。なお、『風土』におけるヘルダーについては、拙論「和辻哲郎『風土』とヘルダー」『思想』1105号(2016)を参照されたい。

2. 和辻文庫のヘルダー著作集と『イデー』

考察に先立って、和辻文庫の『イデー』について書誌的な事柄を述べておきたい。

和辻文庫の『イデー』は、5巻・4冊からなるヘルダーの著作選集 *Herders Ausgewählte Werke*, hrsg. von Bernhard Suphan, Berlin: Weidmann, 1884-1901 に収められたものであり、第4巻・第5巻が『イデー』である。著作選集の編者であるベルンハルト・ズプハン(1845~1911)は、今日でもヘルダー研究の基礎となっている全33巻のヘルダー全集 *Herders Sämtliche Werke*, Berlin: Weidmann, 1877-1913の編者である。全集の完結は1913年であり、著作選集はその途中で出版されたものである。この著作選集の『イデー』に和辻によるかなりの書き込みが残されている。これを、和辻がヘルダーを論じた先述の諸著作と比較することによって、和辻がヘルダーをどのように読み、まとめていったか、その過程をたどることが可能になるのである。

まず、第4、第5巻以外の内容であるが、それらは文芸作品と翻訳にあてられている。第1巻には、戯曲『アドメトゥスの家』（1802）など六作品が収められている。第2、第3巻は一冊にまとめられ、ヨーロッパ内外の民衆の歌を翻訳して編んだ『民謡集』（1778～79）などが収められている。『イデー』以外の先に挙げたヘルダーの諸著作は収められていない。

和辻の書き込みは『イデー』以外には見られない。書き込みは、全四部からなる同書の全体にわたるが、第1部と第2部が中心である。とりわけ、第2部・第9巻をなす各章——第1章「人間はすべてを自身の内から生み出すと思ひ込むものだが、その諸能力の発達においては、他者に依存するものである」、第2章「人間の形成のための特異な手段は言語である」、第3章「人類のすべての学問、技術が発明されたのは、模倣と理性と言語によってである」、第4章「諸々の統治機構は、多くは相続された伝統によって、人間の間に着した秩序である」、第5章「宗教は地球上の最古で最も神聖な伝統である」には、欄外の書き込みや下線が集中している。また『イデー』には、地球上のさまざまな地域の民族についての叙述が含まれているが、日本を含むアジア諸地域、中近東、アフリカ、太平洋諸島、ペルーやメキシコなどの南北アメリカの叙述に繙読の跡がみられる。

『イデー』へのこうした書き込みには、和辻の『近代歴史哲学の先駆者』のヘルダー論との対応が著しい。例えば、『近代歴史哲学の先駆者』の次の箇所。

かくしてヘルダーにおいては、歴史の哲学の原理は、伝統と有機的な力とであるといわれる。伝統とは、教育の本質を言い現わした概念である。教育はもともと模倣と練習とにほかならないが、これは模範として先にあるものが模倣として後に来るものの中へ移り行くことであって、文字通り伝承である。すなわち伝え（mitteilen）また承ける（aufnehmen）ことである。この承けつぐ力が、有機的な力と呼ばれる。それによって第二の創造（Genesis）が行なわれ、その成果が文化として成り立つのである。従って、いかなる民族にも、文化のないものはない。それは、人間の生き方を教えるところの伝統であり、また、人間の幸福を作る仕方を教える伝統でもある。いかなる人もこの伝統を脱することはできない。そこで、かかる伝統の連鎖を追跡する歴史哲学が、真の人類史となるのである。（VI, 414f.）

これは、和辻文庫の『イデー』では、第2部・第9巻・第1章の欄外書き込みの一部に対応している。和辻文庫のヘルダー著作集・第4巻の340頁以下である（SWS XIII, 347ff.）⁽⁵⁾。対応個所の欄外書き込みを列挙してみよう。書き込みのまとめりに○印を付す。

○歴史の哲学の原理：伝統と、有機力と、○教育 = 模倣練習 = überliefern ○genetisch-Mitteilung
○organisch-Aufnahme ○人間の第二の Genesis = Kultur ○いかなる民族にも Kultur あり。○人間の幸福、生き方の或る形式への教育の伝統

これらは 340~341 頁の欄外に記されたものであり、その箇所のヘルダーの思想を要約したものである。ただし、先に引いた『近代歴史哲学の先駆者』からの引用の最後、「そこで、かかる伝統の連鎖を追跡する歴史哲学が、真の人類史となるのである」に対応するのは、和辻文庫『イデー』では、しばらく後、同じ章の 344 頁 (SWS XIII, 352) 下段にある次の書き込みである。——「(3) 伝統の連鎖を辿る歴史哲学は真の人間史也」

和辻がヘルダーのテキストを読み、まとめ、自身の文章を形成していった様を彷彿とさせる資料である。

和辻の書き込みは、こうしたテキストの要約に関わるものが大半であるが、評言も散見される。『イデー』第 2 部・第 9 巻・第 4 章、和辻文庫ヘルダー著作集・第 4 巻 365~367 頁 (SWS XIII, 375ff) の欄外への書き込み、「◎自然状態を社会とするは卓見なれども、原始社会の宗教性を未だ理解せず。自然的結合としての家族を最初と考ふ」、 「Herder の勝手な思弁なり。」、 「⊗原始的な王の問題に、末世たる Rom や Griech.l. [ギリシア] が出てくる。Herder の原始社会の知識の欠乏!」、第 2 部・第 9 巻・第 5 章、和辻文庫ヘルダー著作集・第 4 巻 377 頁 (SWS XIII, 389) の「◎王の宗教的意義を理解せず」などである。和辻がヘルダーのどこに違和感を持ち、批判しようとしていたのかが窺われる資料である。これらの書き込みは『近代歴史哲学の先駆者』の結尾部のヘルダー批判 (VI, 417ff) に対応している。なお、牧野前掲書の 84~85 頁に掲げられた『イデー』の写真版は、これらの箇所のうち、ヘルダー著作集・第 4 巻の 366~367 頁である。

以上のように、和辻文庫『イデー』の書き込みは、『近代歴史哲学の先駆者』との対応が著しい⁽⁶⁾。それならば、ヘルダーを論じたもう一つの著作『風土』との対応はどうかという問題が生じるが、一部の下線や欄外の書き込みを除き、両者の対応はほとんど見いだせない。否、そもそも『風土』における『イデー』の引用頁数と和辻文庫の『イデー』の頁数はまったく対応しない。しかも和辻文庫『イデー』の欄外には、その対応しない頁数を単行本『風土』(岩波書店、1935) と照合した頁数の書き込みがいくつか見られる⁽⁷⁾。これらから『風土』所収のヘルダー論執筆の際には別の版の『イデー』を用いたことが知られるのである。

『風土』のヘルダー論において和辻が用いた『イデー』は引用頁数の照合によって、*Johann Gottfried von Herder's Ideen zur Geschichte der Menschheit*, hrsg. durch Johann von Müller, in: *Johann Gottfried von Herder's sämtliche Werke*, hrsg. von Johann Georg Müller, u. a., in 60 T., Stuttgart u. Tübingen: Cotta, 1827-1830 であることが判明する⁽⁸⁾。『風土』において和辻は『イデー』を *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit* ではなく *Ideen zur Geschichte der Menschheit* と表記しているが (VIII, 209)、この点もこれを示している。この版の『イデー』を収めた全集は、1805 年から 20 年にかけてコッタ書店から刊行されたヘルダー全集のポケット版として 1827 年から 30 年にかけて出版されたものである。コッタ版全集は、1803 年に世を去ったヘルダーの意向に沿う形で妻のカロリーネ、長男のゴットフリート、歴史家のヨハンネス・フォン・ミュラー、弟のヨハン・ゲオルク・ミュラーらによって編纂されたものである。コッタ版全集は全 45 部からなるが、ポケット版全

集は全60部であり、両全集の『イデー』の頁数は一致しない（『イデー』の表記はコッタ版も *Ideen zur Geschichte der Menschheit* である）。コッタ版系統のヘルダー全集は、先に述べたズプハン版のヘルダー全集が完結する以前に流布していた全集である⁽⁹⁾。和辻の用いたコッタ・ポケット版『イデー』は和辻文庫ではなく、所在は不明である。

1950年に刊行された『近代歴史哲学の先駆者』は、その「後記」に言うように「昭和十九[1944]年の秋ごろ」に書き始められ、その年の末ごろに途中で断念された「歴史的自覚の問題（断片）」がもとになっている（VI, 420）。この論文は、題名を変えずに雑誌『展望』1946年7月号に掲載された（全集未収録）。『近代歴史哲学の先駆者』でのヘルダーについての叙述は、補訂が加えられているが「歴史的自覚の問題（断片）」でのそれを踏襲している。したがって、和辻文庫の『イデー』が読み進められたのは戦時下、1944年の後半であったことになる。

3. 『近代歴史哲学の先駆者』におけるヘルダー

以下、和辻文庫の『イデー』を手がかりとしながら、『近代歴史哲学の先駆者』におけるヘルダー論的特質を、二点にしぼって考察してみたい⁽¹⁰⁾。

(1) 「伝統」と「文化」への視点

前節では、『近代歴史哲学の先駆者』からその一節を引き、和辻文庫の『イデー』との対応を示した。その箇所から考えてみたい。

すでに述べたように、前節で引用した和辻の一節は『イデー』の第2部・第9巻・第1章の内容の一部を要約したものである（WB IV, 340-344/SWS XIII, 347-352）⁽¹¹⁾。だが同時に、そこには和辻による再構成の跡も見られる。すなわち、和辻からの引用の最後の部分——「そこで、かかる^レ伝統^の連鎖^を追跡する歴史哲学が、真の人類史となるのである」（WB IV, 344/SWS XIII, 352 に対応）とそれまでの部分の間には、ヘルダーのテキストでは内容のさらなる展開がおこなわれている。これが先の和辻の文章では登場しないのである。もちろん、要約や紹介は逐条的なものである必要はない。しかし、省略部分のヘルダーのテキストには次のようなものがある。

神が人間をその協力者に採用し、この地上での人間の形成を人間自身に委ねたということは、人間をきわめて得意にさせる。だが、神によって選ばれたこの手段こそ、地上でのわれわれの存在の不完全さを示すものにほかならない。元来われわれはまだ、人間であるのではなく、日々、人間となる^レのだからである。自分のなかから得るものはなにもなく、すべてを手本や教えや練習によって得、それによってまるで蠟のように形態を手に入れるとは、なんとみじめな存在であろう。理性を誇るというのなら、広大な地球上での同胞たちの活動の場を凝視するがよい。さまざまな音の入り混じった彼らの不協和な歴史（ihre vieltönige, dissonante Geschichte）を聴くがよい。ひとりの人

間、ひとつの民族、——否、一連の諸民族であることもしばしばである——の習慣となり得なかったどんな非人間性があるだろうか。彼らの多く、否、ひょっとしたらそのほとんどが、同胞の肉を食らったのである。相続された伝統は、ありとあらゆる愚かしい想念を、そこここで現実に神聖化したのではなかったか。それだから、人間ほど低級な理性的存在者はありえないのである。(WB IV, 343f./SWS XIII, 350f.)⁽¹²⁾

確かにヘルダーは、和辻がまとめたように、人間が「伝統」や「文化」のなかでの教育や継承を通してはじめて人間となると考える。だがそれは、すべての「伝統」や「文化」をそのまま肯定することを意味しない。人間がそのような仕方ではしか人間に形成されえないということは、人間の不完全性の証明でもある。否、それによって、人間の人間化の過程がおびただしい「非人間性 (Unmenschlichkeit)」を生み出す過程でもあるという逆説が生じることとなる。凝視された人類史は、人類がその「同胞の肉を食らう」そうした「非人間性」の展示場でもある。

引用した箇所は、和辻が要約した内容が述べられた後に登場する。和辻の文章の最後にあった「そこで、かかる^レ伝統^レの連鎖^レを追跡する歴史哲学が、真の人類史となるのである」は、ヘルダーでは上の引用箇所の後で、「伝統」と「文化」の否定的な側面を述べた後ではじめて登場する。この否定的な側面は挿話的に言及されたものではなく、「伝統」と「文化」の肯定的な意義と同じ重みを持って、この章において提示されている。肯定的な意義が「第一に (Zuerst)」(WB IV, 342/SWS XIII, 349)、否定的側面が「第二に (Zweitens)」(WB IV, 343/SWS XIII, 350) という形で、同等に分節されて提示されている。「伝統」と「文化」の謎めいた二面性が直視され、その後で、「第三に (Drittens)」(WB IV, 344/SWS XIII, 352) と分節されて、「歴史哲学」の問いが立てられているのである⁽¹³⁾。

ヘルダーはこの章で、「伝統」と「文化」の二面性が交錯する歴史を「迷宮 (Labyrinth)」に喩えている (WB IV, 344/SWS XIII, 351)。見通しがたい「迷宮」のなかに「非人間性」の克服に向かう道を探るのがヘルダーの「歴史哲学」である。「迷宮」においては「智慧のごくわずかの財宝」(ebd.) が、人から人へと、多くは「静かに、隠されて」、その結果を知ることまればな形で受け渡され、変容し、付け加えられてゆく (WB IV, 346/SWS XIII, 353)。ある時は、廃墟のなかで受け渡しは途絶えてしまう (WB IV, 345/SWS XIII, 352)。歴史から抹消されることもあろう。幸運な場合には、断絶の後にふたたび過去が想起され、受け渡しが再興される。「諸個人を通して地球を取り巻いてゆく」「形成の黄金の連鎖 (Goldene Kette der Bildung)」(WB IV, 345/SWS XIII, 353) とも呼ばれるこの智慧・経験の継承と変容、付加の屈折した過程が、「迷宮」のアリアドネの糸である。時代と地域を越えて織りなされるこの糸は無数であり、単一の筋書きに収まらない。他方で「迷宮」は、歴史的時間のなかにあるものとして、絶えず増築されてゆく。だが、人類は未来において「迷宮」を抜け出すであろう。密やかな「形成の黄金の連鎖」のみが人類史を肯定し得るものにするのである。これがヘルダーの言う「伝統の連鎖を追跡する歴史哲学」(WB IV, 344/SWS XIII, 352) である⁽¹⁴⁾。

ここに示されているのは、いわゆる〈古き良き伝統〉の美化とは全く異なった視点と言わなければな

らない。和辻においては、ヘルダーの歴史哲学の問いの磁場を形作っていた一方の極が取り払われ、内容が平坦化され、「伝統」の肯定的側面のみが際立たされている。

先のヘルダーからの引用には「元来われわれはまだ、人間であるのではなく、日々、人間となるのだからである」という言葉があった。この言葉は、和辻においては、別の箇所が登場し、そこでの論旨を補強する材料に転用されている。和辻の文脈とヘルダーの文脈は、当然のことながら、ずれることになる。以下、この点を見ることにしたい。

『近代歴史哲学の先駆者』では、先に引いた和辻の文章（VI, 414f.）のしばらく後で、次のように述べられている。

自然人は、たといその生活において局限されているとしても、一層健全な、すぐれた人間である。ヨーロッパには種々の発明が蓄積されてはいるが、それを使う人々が発明者の水準に立っているわけではない。それを考えると、近代ヨーロッパの発明が、一体地上に幸福をもたらしたかどうかを疑いたくなる。火薬の発明者や、磁針の動く方向に初めて注意した人などは、その発明が地球の端々にまでいかに多くの破壊や不幸をもたらすかを、予見してはいなかったであろう。かくヘルダーは論じている。これはベーコンとは正反対の態度である。しかし、人間の神的な働きである発明が、かくも多くの罪悪や不幸をもたらすことは、一体何を意味するであろうか。それに対する答えは、これもまた人間性への教育の一つの手段である、と解することである。人類はただ人類自身によってのみ育成される。しかるにわれわれは、実はまだ人ではなくして、日々に入になるという段階に立っている。この人間の不完全性が、歴史の暗黒面を作り出すのである。智慧が克つためには、まず痴愚が現われなくてはならない。地上は人間性への練習場である。（Ebd., 416）

引用の文章の主題、近代ヨーロッパの技術への批判は、「人類のすべての学問、技術が発明されたのは、模倣と理性と言語によってである」と題された『イデー』第2部・第9巻・第3章の内容の一部（WB IV, 361ff./SWS XIII, 370ff.）をまとめたものである。これに、先の第2部・第9巻・第1章からの引用にあった「元来われわれは、まだ人間であるのではなく、日々、人間となるのだからである」という言葉が、「われわれは、実はまだ人ではなくして、日々に入になるという段階に立っている」という表現となって、つなぎ合わされている。その後の和辻の文章、「智慧が克つためには、まず痴愚が現われなくてはならない」、「地上は人間性への練習場である」も同じく、第2部・第9巻・第1章から取られたものである（WB IV, 345/SWS XIII, 352）。これによって、人類史上の「伝統」と「文化」の足跡の全体に向けられた先のヘルダーの思想（そこには中世から近代にいたるヨーロッパ史への批判的省察が含まれる）は、近代ヨーロッパの技術への批判に限定されることになる。ヘルダーの思考が切り貼りされ、別の文脈に嵌め込まれているのである。

興味深いことに、和辻の文中の「歴史の暗黒面」という言葉は、和辻文庫の『イデー』の書き込みにも見られる。それは、まさに、先の第2部・第9巻・第1章からの引用における「非人間性」という

語の欄外に、その語への下線とともに書き込まれている（WB IV, 343/SWS XIII, 351）。だが、それがヘルダー論のテキストに浮上する時は、「近代ヨーロッパの発明」への批判に限定されてしまう。「伝統」と「文化」の二面性についてのヘルダーの省察は、非ヨーロッパの読者である和辻にも問いかけを含むはずである。だが、和辻は「伝統」と「文化」の二面性についてのヘルダーの省察を読み、熟知しながら、それに応答しなかったと言わなければならない。

もっとも、「歴史の暗黒面」へのヘルダーの省察は、和辻において別の箇所であれられているとも言う。先の引用よりもかなり前で、和辻は次のように書くからである。

動物は、その有機的組織が達成すべきである限りのことを、すでに十分に達成しているが、人はその本質の要求するところをいまだほんのわずかしか達していない。従って、下から見れば、地上的組織の連鎖の最高の一環であるが、上から見れば、より高い生類の連鎖の最低の一環に過ぎぬであろう。そう考えれば、人間の現状は、二つの世間の中間項である。そういう地位のゆえに、人は、おのれ自身との矛盾の中に陥っている。神々しい人間性が動物的なものと結合し、その支配のもとに立っているのである。人はただ苦しい不断の戦いを通じてのみ、神々しい人間性を、すなわち真のおのれ自身を、実現することができる。人類の歴史全体を通じて人類の目ざしているのは、美しい友情や真実の共同にほかならない。そうであるならば、やがて実現さるべき新しい人間の形態は、真に人間的な共同体にほかならぬであろう。これが人間の進歩についてのヘルダーの見通しなのである。（VI, 409）

だが、人間における「人間性」と「非人間性」の対立は、「人間性」と「動物的なもの」の対立にふたたび微妙にずれている。

これは、「我々の人間性は下準備であり、将来開化する蕾にすぎない」と題された『イデーン』の第1部・第5巻・第5章（WB IV, 186ff/SWS XIII, 189ff.）, および「人類の現在の状態は、おそらくは、二つの世界を結ぶ中間項である」と題された第6章（WB IV, 191ff/SWS XIII, 194ff.）の内容の一部に対応する。その要約として、上の文章は必ずしも誤っているとはいえない。しかしこれは、ヘルダーでは、それに先だって「人間は、より繊細な衝動へ、すなわち、自由へと組織されている」と題された第1部・第4巻・第4章（WB IV, 139ff/SWS XIII, 142ff.）で提示された、自由意志を持つ存在としての人間という論点と結び合っている。人間は、自由意志を持つ点で動物と区別される存在である。だが、まさにそのゆえに、人間は「しばしば動物よりも邪悪になりうる」（WB IV, 145/SWS XIII, 147）。人間における「動物的なもの」の克服には、そのような意味での「非人間性」の克服が含まれざるを得ない。ヘルダーにおいて「伝統」や「文化」は、生物的な誕生とは区別される「第二の創造」（WB IV, 341/SWS XIII, 348）の産物であるが、そこにおいては、動物においてはあり得ない多種多様な「非人間性」が生み出され、生の破壊に至る可能性が孕まれる。先の『イデーン』第2部・第9巻・第1章からの引用にあった「相続された伝統は、ありとあらゆる愚かしい想念を、そこここで現実に神聖化した

のではなかったか」という言葉は、そのような視点から発せられたものである。だが、そのように問うヘルダーを上の和辻の文章から思い描くことはできないのである⁽¹⁵⁾。

(2) 「人間性」と「掟」

もう一点は、ヘルダーの〈人間性 (Humanität)〉の思想に関するものである。和辻はそれを要約して次のように述べる。

[...] 人体の有機的構造そのものがすでに人の本質を示しているといわれる。すなわち人は、理性の活動、技術、言語、自由などの展開、をなすべきように組織されているのである。この「人を人たらしめている本質」が Humanität と呼ばれる。つまり人は、「人であること」よりもすぐれた規定を持たないのである。動物にも、伝達、共感、共棲などの衝動はあるが、しかしそれらは言語を持つ人間において比較にならないほど高度に発達し、人々を共同体的自由意志的な堅い結合に導いて行く。その端的な例としては性愛や母子の愛をあげることができる。ここには深い共感共情があり、そうしてその共同性の中から長い年月を費やして新しい人が養育しいだされる。(VI, 408f.)

これは「人間は人間性と宗教に向けて形成されている」と題された『イデー』第1部・第4巻・第6章 (WB IV, 151ff./SWS XIII, 154ff.) に依拠したものである。和辻はヘルダーに従って「理性の活動、技術、言語、自由などの展開」、「伝達、共感、共棲などの衝動」の発達、それによる「共同体的自由意志的な堅い結合」の形成、「性愛や母子の愛」を〈人間性〉の内容として提示する。しかし、この章でヘルダーは次のようにも述べる。

だが、人間の単なる共感、すべてにはゆきわたらない。それは、制約され複雑に組織された存在としての人間にとっては、遠く隔たったすべてのものに対しての曖昧なしかもしばしば無力な導き手たりうるにすぎなかった。それゆえに、正しく導く母 [なる自然] は、人間の幾重にも密やかに織り込まれた小枝を、より欺きようのない一つの基準のもとにまとめあげたのであった。これが、正義と真理の規則である。誠実たるべく人間は創られている。その形態のなかのすべてが頭に仕え、その二つの目がただ一つの事象を見、その二つの耳がただ一つの音を聴くように、[...] 内面においても、公正と平衡の大いなる掟が人間の基準となったのである。他者が汝にすべきでないこと、汝が欲するものは、他者にも為すなかれ。他者が汝にすべきことは、他者にもせよ。[...] これは [...] 人間の全感官の構造に基づいている。否、人間の直立の形態そのものに基づくと言いたい。(WB IV, 156f./SWS XIII, 159f.)

「単なる共感」の狭さが指摘されている。問題にされているのは、この箇所の直前で述べられた「最初の社会」としての家族における「共感 (Mitgefühl)」である (WB IV, 156/SWS XIII, 159)。そのよ

うな「共感」は、親密さが働く領域の外にある「遠く隔たった」ものに対しては「無力」とされる。これとの対比で、「正義と真理の規則 (*die Regel der Gerechtigkeit und Wahrheit*)」, 「公正と平衡の大いなる掟 (*das große Gesetz der Billigkeit und des Gleichgewichts*)」が強調されている。人間は、親密圏を越えて広く他者を認めることができなければならない。「共感」もそれに伴ってすべての他者に対して開かれたものとなる。他者と自己を想像のなかで交代させ、行為を選択する。そのような「規則」「掟」が、直立歩行する人間には備わっているとするのである。

ヘルダーの議論は一見素朴なものであるが、近年明らかにされたように、「憐みの情」と「崇高な、合理的正義の格率」を分離して前者のみが人間の自然(本性)に内在するとしたルソー『人間不平等起源論』(1755)への反論として提示されたものである。その際にヘルダーは、古代のキケロ(BC106~43)から近世のグロティウス(1583~1645)に至る自然法の議論に依拠している⁽¹⁶⁾。ヘルダーの「公正と平衡の大いなる掟」における「公正(Billigkeit)」は、キケロにおいて人間の自然(本性)に内在するとされた〈公正(aequitas)〉に淵源する。〈公正〉は、個々の事例に即して正・不正を判断する能力であり、制定された法が恣意的である際の批判の原理となるものでもある。キケロの〈公正〉は、法を訂正・補完する能力としてグロティウスの自然法思想に引き継がれてゆく。彼において自然法は、神学的な基盤から切り離されるが、〈公正〉の基盤としての身体を強調するヘルダーの議論もその流れのなかにある。ヘルダーが提示しているのは、現代でも十分に解決されていない、文化の多様性と文化横断的な規範の問題、文化相対主義をめぐる問題である。

和辻は、先に引用した『イデー』の箇所を読み、欄外に「Mitgefühlの他に正義と真実」と書き込み、「これが、正義と真理の規則である」に下線を、「公正と平衡の大いなる掟」を述べた箇所に下線と欄外縦線を引いている(WB IV, 157/SWS XIII, 160)。しかし『近代歴史哲学の先駆者』の本文が構成される際には、ヘルダーの〈人間性〉概念に含まれる文化横断的な規範が消去され、〈人間性〉概念が特定の共同体の内部で完結するかのようにまとめられてしまうのである。

以上と同様の問題は『近代歴史哲学の先駆者』の結尾部にも潜んでいる。和辻は次のように書く。

[...] 霊魂不滅の信仰も、あらゆる民族に共通であり、従っていかなる未開人にも存するのであって、発達した理性の働きを待つまでもない。人間性の神聖な法則や規則もまたそうである。理性によって考え出されるまでもなく、それはあらゆる民族の中に生きて働いている。言語なく理性なく宗教・風習もない民族などは、かつてなかったし、また今でもない。食人族といえども、おのれの兄弟や子供を食いはしない。食人の風習は、人間を破壊するためではなくして逆にそれをまもるために、すなわちその部族の全体性を自覚し活気づけるために、存しているのである。(VI, 419)

これは、「宗教は地球上の最古で最も神聖な伝統である」と題された『イデー』第2部・第9巻・第5章(WB IV, 375ff./SWS XIII, 387ff.)をまとめたものである。先に検討した「正義と真理の規則」, 「公正と平衡の大いなる掟」は、ここにようやくふれられていると言えなくもない。しかし、和辻は

「人間性の神聖な法則や規則」が何であるかを述べていない。『イデーン』を読まずに、この言葉だけから先の「正義と真理の規則」, 「公正と平衡の大いなる掟」の内容と意義を把握することは不可能である。少し離れて置かれた「食人族といえども、おのれの兄弟や子供を食いはしない」という文が、そのような規範的内容を示唆すると言えなくもない。だが、そこにも問題が潜んでいる。この文に続く「食人の風習は、人間を破壊するためではなくして逆にそれをまもるために、すなわちその部族の全体性を自覚し活気づけるために、存しているのである」という文である。ヘルダーは、そのようには書いていない。『イデーン』の当該箇所を示せば次のようになる。

食人族といえども、その兄弟や子供を食いはしない。[捕虜を食うという] この非人間的な習慣は、彼らにとっては、勇敢さの維持と敵同士が恐怖を与え合うための残酷な戦時法である。つまりそれは、粗野な政治的理性 (eine[r] grobe[n] politische[n] Vernunft) の産物以上でも以下でもない。この政治的理性が、これらの民族においては、祖国のためのこれら少数の犠牲ですますために、人間性を抑圧したのである。これは、われわれヨーロッパ人が、他の物事のために、いまなお人間性を抑圧し続けているのと同じである。(WB IV, 381/SWS XIII, 393)

「食人」によって「部族の全体性を自覚し活気づける」ことを、和辻は「人間性」の成就と言おうとしているのか、否か。ともかくも、ヘルダーは、「食人」を「非人間的」なものとして、「人間性の抑圧」とする。ただしそれは、彼らにも備わる「人間性」の抑圧の結果であって、この部族の成員そのものが「非人間的」なのではない。「われわれヨーロッパ人が殺戮を恥じないのと対照的に、彼らは異郷から来た者 (Fremde) に対しては、この残酷な行為を恥じた。否、この悲しき籤に当たらなかつたどの捕虜に対しても、彼らは友愛と高貴を示したのであった」(ebd.)。すなわち、「人間的」な種族が、どこかよそに——例えば、ヨーロッパに——存在するのではない。「食人」は、国益のために戦争を続けるヘルダー眼前の18世紀ヨーロッパの「政治的」国家「理性」の所業と同じく「非人間的」である。「食人族」は、彼らの生活世界において、「人間性という根源的な感情 (das ursprüngliche Gefühl der Humanität)」(WB IV, 381/SWS XIII, 394) の抑圧を強いられ、選択したのである。

ヘルダーから和辻まで約150年の時が流れ、その間に人類学的な知見が蓄積されている。『倫理学』での叙述に見られるように、和辻はそれを知悉している。和辻が「食人の風習は、人間を破壊するためではなくして逆にそれをまもるために、すなわちその部族の全体性を自覚し活気づけるために、存している」と主張しようとするのであれば、『イデーン』第2部・第9巻・第5章の叙述の紹介とは区切る形でそれを述べ、その主張の正当化を試みるべきであったであろう。いずれにせよ、ヘルダーにおいてはこの問題に対する判断は、彼自身が生活するヨーロッパへの批判、さらには当時のヨーロッパ人が非ヨーロッパ世界でおこなっている行為への批判と同一の規範的根拠、身体に基礎を置く「公正と平衡の大いなる掟」に基づいているのである。

4. むすび

『近代歴史哲学の先駆者』においては、ヨーロッパ人によるアメリカやアフリカの先住民の抑圧に対するヘルダーの批判に多くの頁がさかれている。『イデー』を貫く重要な主題のひとつが言い当てられていると見てよい。人間は人間である以上、「人間性」を知り、感じ、あらゆる時代と場所でそれを——同時に、「非人間性」をも生み出しながら——実践して生きている。そのような地球上の人間に対してのヨーロッパ人の行為は、果たして「人間的」と言い得るのか、という問いかけである。ヘルダーはこの観点から、ヨーロッパを絶対的な尺度として非ヨーロッパを〈野蛮〉とみなすことをしりぞける。こうしたヨーロッパ中心主義批判において、ヘルダーと和辻は波長が合っている。

だが問題は、この主題をいかなる地点と時点で述べるかである。ヨーロッパへの批判は、そこに生活する近代初頭のヘルダーが語るか、「歴史的自覚の問題（断片）」が執筆された1944年末や『近代歴史哲学の先駆者』が刊行された1950年の日本の和辻が語るかによって、性格を異にする。ヘルダーがヨーロッパを批判する時、それは自らが属する18世紀ヨーロッパの生活世界とそこにおける読者に向けられたものであり、発話は自己反省的な性格を持つ。地球上の文化の多様性への開眼、そこにおけるヨーロッパ人の行為のあり方、これらが、自分が生活するヨーロッパに対する彼のまなざしに反照してゆく。

非ヨーロッパに対するヘルダーのこのような視点は、ヨーロッパの内部にも向かう。『イデー』第4部・第16巻・第4章「スラヴ諸民族」がそれである。同章においては、キリスト教化の旗印のもとドイツ諸民族がスラヴ諸民族の商業や農耕を破壊し、彼らを絶滅、隷農化したことが率直に述べられている（WB V, 277ff./SWS XIV, 277ff.）。ヘルダーはその際に、スペイン人がペルーで行なっている行為を想起する。世界へ向かう彼の視線はこうして接合される。

20世紀中葉の日本の和辻が、ヘルダーのこのような複合的な省察の視点を受容したか否かが要点である。和辻におけるヨーロッパ中心主義批判は、ヨーロッパという外部に向けられている。しかも、「伝統」「文化」の二面性に目を向けた『イデー』の論点は消去され、「伝統」「文化」の肯定的な側面のみが際立たされている。そのような構図においては、ヨーロッパ批判の論点が自らへと反転することは起こらない。自らの「伝統」「文化」の肯定とヨーロッパ批判が織り成す〈心地よい〉循環の輪が閉じられる。『イデー』の「スラヴ諸民族」の章の主題である諸民族は、ヘルダーが生まれ育ったバルト海沿岸地方、若き日の生活世界に直接関わる諸民族であった。和辻文庫の『イデー』には、和辻がこの章を読み、自らの生活世界に引き寄せて対話した跡は見られない。

最後に、以下の点を述べておく。

『近代歴史哲学の先駆者』のもとになった論文「歴史的自覚の問題（断片）」は、同書とは構成を異にしている。論文では、歴史意識の形成についての哲学的考察の後に、「異つた時代や國土を自分の時代や國土の型にはめて理解する」「時代錯誤」の問題が取り上げられ、「室町時代の物語」が「神功皇后の

新羅征伐を物語るに際して、皇后が唐綾をどしの鎧に身を装はれた」と記していることを例に挙げている。「時代錯誤」は近松やシェイクスピアにも見られると述べた後、話はヘブライ、ギリシア、十字軍をきっかけとする西ヨーロッパ中世における歴史意識に移り、ヴィコとヘルダーを紹介して論文が終わっている。『近代歴史哲学の先駆者』では、「時代錯誤」の部分を含めた前半約四分の一が削除され、西ヨーロッパ中世における歴史意識の叙述以降の文章が増補を加えて採用されている。論文は未完であり断言はできないが、「歴史的自覚」によって「時代錯誤」を克服すること、その手がかりをヴィコとヘルダーに求めることが論文の出発点にあった構想と見ることができる⁽¹⁷⁾。

『近代歴史哲学の先駆者』刊行の後、晩年の和辻は日本の民衆の想像力の古層、「室町時代の構想力」(XVI, 78f.)の系譜を探り、『日本芸術史第一巻——歌舞伎と操浄瑠璃』(1955)を書く。同書で幸若舞『百合若大臣』を論じた際に和辻は、「室町時代後期の物語作者は、神功皇后の新羅征伐をさえも、蒙古襲来の時の海戦の形で想像している」(ebd., 361)と述べ、「時代錯誤」という言葉はないものの「歴史的自覚の問題(断片)」と類似の指摘をおこなっている。同書に続く『自叙伝の試み』(没後1961刊)では、「村の子」としての子供時代の記憶を辿りながら、「わたくしは紅の御裳の上に綾おどしの鎧をつけている神功皇后の姿や、新羅国の大王は日本の犬なりという言葉覚えてる」と述べる。そして「これらは絵草紙のほかに出所のないものである。しかもその言葉が母親の声と結びついているところを見ると、どうやらその絵草紙を母親に読んでもらっていたらしい。こういう絵草紙に現われているのは、室町時代の八幡本地などの構想に端を発し、江戸時代の浄瑠璃を通じて有力に民間に残っていたあの想像力の働きなのである」とする(XVIII, 170)。ここには「室町時代の構想力」が、江戸時代を経て和辻の幼年時代まで連続していたことが語られている。「室町時代の構想力」への関心は、和辻の育った明治の生活世界への関心でもあったのである。

神功皇后という主題は、若き日の『日本古代文化』(1920)や論文「神功皇后について」(1921)に遡る。1944年秋以後、この主題が「時代錯誤」の問題と重ね合わされて和辻のテキストに断片的に現れる⁽¹⁸⁾。この問題が展開されていけば、和辻とヘルダーの間により深い接点が形成されたであろう。だが和辻は「時代錯誤」の克服がどのようなものになるかを語ることはなかった。問題の奥行きに気付きながら封印した感が深いのである⁽¹⁹⁾。

《注》

- (1) 坂部恵「和辻哲郎とヘルダー——精神的観点から」『比較思想研究』第27号(2000), 8頁。
- (2) 例えば、テイラー「承認をめぐる政治」, C.テイラー, J.ハーバーマス他(佐々木毅・辻康夫・向山恭一訳)『マルチカルチュラルイズム』岩波書店, 1996年。
- (3) 代表的なものとしてBernhard Becker, *Herder-Rezeption in Deutschland. Eine ideologiekritische Untersuchung*, St. Ingbert: Röhrig, 1987がある。
- (4) 以下、和辻文庫の書き込みを除き和辻のテキストへの言及と引用は第三次『和辻哲郎全集』による。巻数はローマ数字で、頁数はアラビア数字で示す。[...]は引用者による省略, []は引用者による補い。引用中の傍点、下線は原文のままである。
- (5) 以下、和辻文庫『イデー』の頁数には、対応するズプハン版ヘルダー全集(SWS)の巻数と頁数を併記

- する。
- (6) なお、『近代歴史哲学の先駆者』で和辻が『イデー』を引用する際の頁数は、和辻文庫『イデー』の左右欄外に付加された頁数（以下、欄外頁数）によっている。この欄外頁数は、1784年から91年にかけてハルトクノッホ書店から刊行された『イデー』初版の頁数である。この欄外頁数はSWSの『イデー』にも付されている。
- (7) 和辻による引用頁数の照合の例を挙げておく。単行本『風土』355～356頁には「(do., II, S. 85)」として、「この奇蹟を初めて見たものは何と云ふであらうか。生ける有機力がそこにあるとほか云へないであらう。[...]」という引用がある（VIII, 211）。『イデー』第2部・第7巻・第4章からの引用であるが、この箇所は和辻文庫のヘルダー選集では選集第4巻の269頁（欄外頁105, SWS XIII, 274）にあたる。その欄外には「風土、三五五」という注記が書き入れてある。また単行本『風土』369頁にある「(do., S. 170)」と記された引用——「静かな喜びを以て妻子を慈しみ、己れの部族に對しても己れの生に對してもたゞ控へ目に働く[...]」（VIII, 219）は、『イデー』第2部・第8巻・第5章からの引用であるが、和辻文庫ヘルダー選集では選集第4巻の333頁（欄外頁203, SWS XIII, 339）にあたり、その欄外に「(170)」という書き込みがある。
- (8) 拙論「ヘルダーの『人類歴史哲学考』と和辻哲郎——『風土』から『近代歴史哲学の先駆者』まで」『ヘルダー研究』創刊号（1995）、173頁。戸田行賢「和辻哲郎『風土』形成期における空間性の問題をめぐる一考察——「草稿」における体験記、シュベングラー、ヘルダー、ハイデッガーの取扱い方から見た——」『津山高専紀要』第33号（1994）、33頁も、『風土』の草稿において和辻が『イデー』の上記の版を用いたことを推測している。
- (9) コッタ版系統のヘルダー全集の書誌については、Gottfried Günther, Albina A. Volgina u. Siegfried Seifert, *Herder-Bibliographie*, Berlin u. Weimar: Aufbau, 1978, S. 5ff. を参照。コッタ版全集の特色と問題点については、Günter Arnold, Herder-Editionen, in: Rüdiger Nutt-Kofoth u. Bodo Plachta (Hgg.), *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editionsgeschichte*, Tübingen: Niemeyer, 2005, S. 163ff. を参照。
- (10) 本章の内容は和辻とヘルダーを論じた前掲の笠原（1995）、笠原（2016）、以下二つの拙論：「多元的思考の転生——和辻哲郎のヘルダー受容をめぐって」、原研二他編『多元的文化の論理——新たな文化学の創生へ向けて』（東北大学出版会、2005年）および Herders *Ideen* und Watsuji Tetsuro -Zur Geschichte der Herder-Wirkung im außereuropäischen Gebiet, in: Michael Maurer (Hg.), *Herder und seine Wirkung*, Heidelberg: Synchron, 2014 に生かされている。
- (11) 以下、和辻文庫のヘルダー著作集は、WBと表記して巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で示す。ズプハン版の巻数、頁数を併記する。
- (12) 引用文中の傍点は原文ゲシュベルト、対応する原文を示す際にはイタリックで示す。
- (13) 「第一に」と分節された箇所でも、「混乱をきわめた人類の歴史」（WB IV, 342/SWS XIII, 350）という表現に見られるように、歴史の否定的側面への視点が保たれている。ヘルダーの時代、18世紀後半のドイツの思想的営みは、クリスティアン・ヴォルフ（1679～1754）が唱えた、世界はひとえに人間の幸福のために創造されている、という安易な目的論を批判することから始まっている。この批判とともに、人間にとっての有用性に解消されない自然と人間の豊かさ、複雑さ、謎めいた性格、さらには、人間と自然がもたらす災厄への感覚が鋭くなってくる。『イデー』もこの流れのなかにある。
- (14) 『イデー』の歴史哲学については、拙著『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界——クニッゲ、レッシング、ヘルダー』未來社、2017年、第3章とりわけ第3～4節を参照。
- (15) 『近代歴史哲学の先駆者』の結尾に近い部分では、「世襲の王権」の「力の支配の伝統」のもたらす「深刻悲惨な事実」に言及されている（VI, 418）。これは、「諸々の統治機構は、多くは相続された伝統によって、人間の間に定着した秩序である」と題された『イデー』第2部・第9巻・第4章の内容に対応する。「伝統」と「文化」に対するヘルダーの二重の視点はここによくふれられているとも言えよう。だが、和辻はこれを、「彼〔ヘルダー〕自身の本来の傾向」に反した論点と考える（ebd.）。内容に即した紹介が、ヘルダーのこの主題を浮上させる。だが、和辻の視角が、それを正当に位置付けるのを阻む。「力の支配の伝統」についてのヘルダーの思想は、むしろ、以上見てきたような、「伝統」と「文化」に対するヘルダーの基本的な視点の

帰結である。

- (16) Wolfgang Proß (Hg.), *J. G. Herder Werke*, Bd. III/2, *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit. Kommentar*, München u. Wien: Hanser, 2002, S. 301ff. プロースのコメンタールは、古典古代から啓蒙に至る『イデー』の源泉を詳細に発掘した労作である。
- (17) 削除された部分は『倫理学』下巻(1949)に採用されたが、神功皇后と「時代錯誤」の問題の新たな展開は見られない(XI, 29ff)。
- (18) 『日本倫理思想史』下巻(1952)でも言及がなされている(XII, 504)。この箇所は『尊皇思想とその伝統』(1943)の叙述(XIV, 141ff)に基づくが、そこにはない「時代錯誤」の語が加えられている。
- (19) この問題に関しては、次を参照。脇田晴子『天皇と中世文化』吉川弘文館, 2003年, 90頁以下。崔官『文禄・慶長の役(壬申・丁酉倭乱)文学に刻まれた戦争』講談社, 1994年, 182頁以下。原武史『皇后考』講談社, 2015年, 44頁以下。岡義武『明治政治史』(上)岩波文庫, 2019年, 50頁以下の航海遠略論の叙述と注(1)および212頁注(3)。『近代歴史哲学の先駆者』と同じ年に刊行された『鎖国——日本の悲劇』(1950)においては、日本における「科学的精神の欠如」, 「推理力による把捉を重んじないという民族の性向」(XV, 15)が指摘されている。言うまでもなく『鎖国』には、第二次世界大戦における日本に対する和辻の反省が込められている。だが、「伝統」「文化」の二面性を指摘した『イデー』第2部・第9巻・第1章が和辻に応答すべく追ったであろう問い、昭和初期ないし明治初年から第二次世界大戦終結までの現実から提起されてくる問いは、技術的合理性の視点のみによって答えを尽すことはできない。

Watsuji Tetsuros *Wegbereiter der modernen Geschichtsphilosophie* und
J. G. Herder

KASAHARA Kensuke

Zusammenfassung

1950 hat der Philosoph Watsuji Testuro (1889-1960) das Buch *Kindai rekishitetsugaku no senkusha — Vico to Herder (Wegbereiter der modernen Geschichtsphilosophie. Vico und Herder)* veröffentlicht. Watsuji beschäftigt sich hier mit dem Hauptwerk Herders, den *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*. Seine pluralistischen Gedanken, die den außereuropäischen Kulturen ihre je eigenen Werte zuerkennen, werden hervorgehoben. Das klare Herder-Bild, das Watsuji dem Publikum der Nachkriegszeit präsentierte, hat auf die Herder-Rezeption in Japan einen starken Einfluss ausgeübt. Wenn man aber die Darstellung Watsujis mit dem Text Herders vergleicht, ist auf einige Umformungen hinzuweisen. Der Umformungsprozess kann anhand der handschriftlichen Randbemerkungen des von Watsuji gelesenen Exemplars, das sich in der Watsuji-Tetsuro-Bibliothek der Hosei Universität Tokyo befindet, rekonstruiert werden.

Stichworte: der doppelte Blick Herders auf die Tradition, „das große Gesetz der Billigkeit und des Gleichgewichts“, ein versiegeltes Thema Watsujis: die Legende der Kaiserin Jingû.